

平城京左京五条四坊七坪の調査—廊付き建物と大型井戸とトイレ関連遺構と—

平成13年度から実施している土地区画整理事業に伴う発掘調査によって、平城京左京五条四坊七坪の様相が明らかになりつつあります。昨年度までの調査成果をまとめてみました。

見つかった建物群

平城京内の街区は、一辺約133mの正方形の四周を道路で囲った区画を一つの単位(町)としています。京内の住人は、この区画を統合・細分した宅地を、身分に応じて支給されます。

七坪には、この一町を一体で利用した宅地がありました。発掘調査では、多数の掘立柱建物・列、井戸などが検出され、1～4期の4時期の建物変遷が判明しています。この内**3期**(下図赤色の建物群)が一町利用の時期にあたります。七坪の中央に東西棟を南北に2棟ならべ、北側の建物の東西両脇には脇殿風に南北棟を配した、計画性の高い建物配置となります。特異なのは、北側の建物(SB229)中央から北へつづく廊(SC230)です。

平城京跡(左京五条四坊七坪) 大安寺七丁目

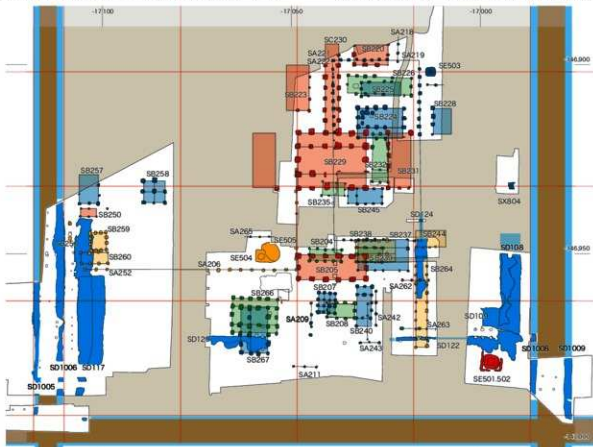


調査地位位置図 (1/10,000)

宅地東西端は築地塀があったと考えられ、中心建物群の南側には東西溝が、さらにその外側の南東隅には井戸があります。

1期(青色)は、宅地東半部中央に掘立柱塀で囲われた区画があり、区画内中央北側には埋蔵をもつ掘立柱建物があります。少なくとも1/2町規模以上の宅地と考えられます。

2期(緑色)は、中小規模の建物が数棟ありま



主要建物配置図 (1/1,000)

すが、配置に特徴がなく、宅地規模等は不明です。

4期（橙色）は、西半部に掘立柱掘で囲われた東西55m、南北30m以上の区画が作られます。区画南東隅には井戸（SE505）がありますが、区画中央部分は未調査です。

廊付き建物（3期 SB229とSC230）

七坪内の建物でとりわけ目を引く建物が、先述した廊とこれを取り付く掘立柱建物（SB229）です。建物は東西18m、南北7.2mで、七坪内では最も規模が大きく、柱の底に沈下を防ぐ石を敷く等の入念な建築を行っています。廊はこの建物北面中央部から北に20m以上つづき、平城京内の宅地では非常に珍しい例です。この廊の先は？残念ながらJR大和路線の線路の下で不明です。

構造が特異な大型井戸（4期 SE505）

井戸枠は、27枚の板を縦方向に円形に組合わせて作られており、内法は1.9mあり平城京内のこの構造の井戸としては最も大型のものと考えられます。また井戸枠の各板も厚さ約12cmで、これも大型です。井戸板は、通常太納組で隣同士を結合しますが、さらに各板の合わせ目部分に凸凹に削り出して、相欠きでより強固に結合している点が特異です。枠内から9～10世紀の土器が出土し、平安時代の井戸と分かります。また近江国保良宮出土品と同範の軒平瓦が、井戸を含め七坪内から出土しており、宅地の性格を知る手がかりとなります。

トイレ関連遺構（1期 SX804）

一辺2m前後の平面方形と考えられる土坑で、掘方の上辺に井状に木材を組む他は何の変哲もない遺構に見えます。しかし、深さ1.3mのある土坑はつやのある黒色土で埋まり、その中からは長さ25～30cmの棒状と板状の木製品が多量に出土しました。これは何かある臭いぞと感じた現場担当者が、土壌を持ち帰り分析を依頼した結果、土壌からは人糞由来の寄生虫卵が多数見つかりました。一緒に出土した木製品は、お尻を拭く木片の「ちゅうぎ 籌木」と考えられ、この土坑には人糞等の排泄物が埋まっていたことが判明しました。排泄物や周囲の土壌に含まれる植物種子や花粉、寄生虫卵の分析から、当時の人々の食生活を明らかにできる貴重な成果です。



廊付き建物（北から）



井戸 SE505（南から）



井戸枠復元模式図と
仕口部分



SX804（南から）と籌木